

令和3年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

学校の現状と課題を踏まえて、重点課題として3項目を取り上げ、目標達成に向けて、当該分掌部が中心となり全教職員の共通理解を図りながら取り組んだ。評価は以下のとおりである。

(1) 児童生徒が主体的に選択できる進路支援の充実

昨年度作成した「障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版」の掲載事業所数を9か所増やして20か所とし、充実を図った。タブレット端末版では、児童生徒が将来のイメージをもち主体的に進路選択が行えるよう、事業所における作業の様子や職員による作業内容の説明等を動画で紹介しており、今年度は、小学部高学年から高等部までのほとんどの学級において、生活単元学習や総合的な学習の時間、職業の授業等で活用した。児童生徒は、タブレット端末を自ら操作し、興味のある事業所を検索して動画を視聴するなど、主体的に学習に取り組む様子が見られた。

(2) 主体的に挨拶できる児童生徒の育成

主体的に挨拶できる児童生徒の育成を目指し、年間を通してあいさつ運動に取り組んだ。児童生徒の挨拶の意義の理解や意識付けを図るため、自校で教材を作成し、全学級で挨拶の指導を実施した。また、児童生徒の実態に応じて挨拶に係る個人目標を設定し、達成状況を年間2回のあいさつ週間時に「あいさつの花」の花びらに表現して校内に掲示した。児童生徒一人一人が目標達成を目指して全校体制で取り組んだことで、挨拶への意識付けが図られ、登下校をはじめ、廊下で教職員や来客とすれ違った際などに自ら挨拶したり、促しを受けて挨拶したりするなど、日常的に挨拶を交わす姿が見られるようになった。

(3) 教員のICT活用能力の向上

児童生徒がタブレット端末を効果的に活用できるよう、教員のICT活用指導力の向上と授業における児童生徒のタブレット端末の活用の推進に取り組んだ。外部講師やGIGAスクールサポーター、情報担当教員による研修を行い、教員の指導力の向上を図るとともに、児童生徒の実態に応じたソフトウェアを作成したり学習アプリ等を活用したりするなど教材研究を行い、効果的な学習が行えるよう取り組んだ。児童生徒は、学習用アプリや写真・動画を活用した学習、コミュニケーション手段としての活用など一人一人の実態に応じて様々な場面でタブレット端末を活用しており、使用頻度も徐々に高くなってきている。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) 障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版に掲載する事業所をさらに増やすための環境整備と、児童生徒や保護者がより利用しやすくするための方法や機会の設定を検討する。
- (2) 児童生徒が意欲をもち続けて主体的に挨拶できるように、あいさつ運動やあいさつの花の掲示など、主体的な挨拶が継続・拡大するような取組を工夫する。
- (3) 児童生徒の主体的、対話的、深い学びを進めていくための、ICT機器の活用方法について授業実践を通して研修を深める。

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和3年度 富山県立しらとり支援学校アクションプラン - 1 -

重点項目	進路支援	
重点課題	児童生徒が主体的に選択できる進路支援の充実	
現 状	<p>昨年度は、児童生徒や保護者、教職員が卒業後の生活や障害福祉サービス事業所での活動などの具体的なイメージをもち、児童生徒が主体的に進路選択できることを目指して、障害福祉サービス事業所ガイドブック（冊子版・タブレット端末版）の作成、事例に基づいた教員向けの学習会、障害福祉サービス事業所合同説明会に取り組んだ。これらの取組では教員向けの学習会に参加した教員の満足度96%、合同説明会の参加事業所及び保護者の満足度95%であり、一定の成果が得られた。</p> <p>ガイドブック冊子版は76事業所の情報を掲載し、保護者、教職員、協力事業所に配付した。タブレット端末版は11事業所の情報を掲載しており、一部の学級で活用したところ、動画で紹介されているため、事業所の雰囲気や様子が分かりやすいとの感想があった。</p> <p>そこで、今年度は児童生徒や保護者がより主体的に進路選択ができるように必要な情報をさらに収集して、タブレット端末版の内容の充実を図るとともに、授業や進路指導等で一人一人の実態やニーズに応じて効果的に活用していきたいこれらの取組を通して、児童生徒、保護者が主体的に進路選択できるよう進路支援の一層の充実を図りたい。</p>	
達成目標	障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版の充実	障害福祉サービス事業所ガイドブック冊子版・タブレット端末版を活用した進路支援の推進
	・7事業所の情報の追加	・授業等で障害福祉サービス事業所ガイドブックを使用した学級の割合 小学部（5・6年）60% 中学部70% 高等部 80%
方 策	<ul style="list-style-type: none">・本校の卒業生が利用している障害福祉サービス事業所の詳細をまとめた障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版の掲載事業所数を増やし、より多くの生徒のニーズに合わせた情報提供ができるようにする。・生活単元学習、総合的な探究の時間、職業などの学習や進路相談会の中で障害福祉サービス事業所ガイドブック冊子版・タブレット端末版を活用する。	
達成度	<障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版の作成> ・新たに9事業所を掲載	<授業等で障害福祉サービス事業所ガイドブックを使用した学級の割合> 小学部（5・6年）92% 中学部 100% 高等部 100%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none">・障害福祉サービス事業所の様子を動画で閲覧できるように、新規に9事業所の協力を得て、動画を制作した。昨年度ガイドブック・タブレット端末版に掲載した事業所と合わせて20事業所の情報を掲載している。・ガイドブック・タブレット端末版を使用して、小学部（5・6年）では「働く人を見に行こう」、中学部では「働く人を見学しよう」「進路について考えよう」などの学習で、将来の生活や仕事についての学習を行った。高等部では、「就業体験の事前学習」で、体験事業所の仕事内容を確認したり、体験の振り返りに活用したりした。・小学部、中学部の保護者対象の進路説明会でガイドブック・タブレット端末版を紹介するとともに、実際に保護者がタブレット操作を体験できる機会を設定した。	
評 価	A	障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版の作成に当たり、福祉事業所から多くのご協力をいただき、当初予定していた数を上回る事業所の情報を掲載することができた。 授業等での活用では、タブレット端末を利用したことや動画を掲載したことで多くの児童生徒がタブレット端末を自分で操作して検索したり、仕事の様子をみて「〇〇している。」と声を上げたりするなど興味をもって視聴する姿が見られ、各学部の進路学習に係る身近な教材として役立てることができた。 進路説明会で保護者が直接操作した際には、「わかりやすくてよかった。」や「もっと見たかったので、学習発表会などで閲覧コーナーを設けてほしい。」などの感想が多く寄せられた。
学校評議員の意見	<ul style="list-style-type: none">・就業体験先の選択等に当たり、タブレット端末で実際の事業所の様子を動画で見て情報を得ることは、児童生徒にとって分かりやすく理解しやすい。・タブレット端末に掲載する事業所が増え、児童生徒の皆さんが進路について考える一助となったことは評価できる。	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none">・障害福祉サービス事業所ガイドブック・タブレット端末版に掲載する事業所をさらに増やすための環境整備と、活用方法や閲覧しやすくするための方法を検討していく必要がある。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	挨拶の習慣化	
重点課題	主体的に挨拶できる児童生徒の育成	
現 状	<p>本校の児童生徒の挨拶における実態は「おはよう（ございます）」や「さようなら」が習慣化している児童生徒、教師に促されてできる児童生徒、身近な相手であれば自分からできる児童生徒など様々である。また、日中に廊下などで教員や来校者に対して「こんにちは」と言葉を掛けることについては、朝や帰りの挨拶ほど定着はしていない。そこで今年度は、登下校時の挨拶「おはよう（ございます）」「さようなら」に加え、日中の「こんにちは」、更に、感謝の気持ちを伝える「ありがとう」を含めて挨拶に取り組み、挨拶の意識付けや習慣化を図りたいと考える。生徒会執行部の中には、挨拶の声が聞かれる明るい学校にしたいという思いをもつ生徒もおり、生徒会を主体として、挨拶運動や挨拶タイム、校内放送などで挨拶する意識を高めていきたい。</p>	
達成目標	各学級で挨拶に関する指導の実施	挨拶に関する個人目標の達成率
	各学級1回以上	80%
方 策	<p>○挨拶に関する指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学級での指導に活用できるプレゼンテーションソフトを用いた教材を作成し、タブレット端末で見ることができるようにする。 <p>○目標設定と評価</p> <ul style="list-style-type: none"> 4種類の挨拶について、個に応じて達成可能な目標を設定する。(6月) 挨拶に関する指導や挨拶運動を通して、目標が達成できたか評価する。(12月) <p>○「挨拶の花を咲かせよう」運動の実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童会や生徒会執行部を中心に「挨拶の花を咲かせよう」のスローガンで呼びかけ、児童生徒各自の挨拶に関する良いエピソードを花形の色紙に記入したものを、掲示板の花壇に貼る。 執行部生徒を主体とした挨拶運動と挨拶タイムの実施やポスターの作製及び掲示を行う。(年間3回、各1週間程度) 	
達 成 度	全学級で1回以上実施	挨拶に関する個人目標の達成率 97%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> 各児童生徒の実態を把握するためのアンケートを実施し、その状況を基に、児童生徒と担任が相談して一人一人の挨拶の目標を決めた。目標は学級内に掲示し、いつでも見られるようにした。 挨拶に関する指導の手立てとして、挨拶の大切さやクイズ等の教材を作成し、各学級の指導に活用できるようにした。 「あいさつの花を咲かせよう」運動を2回実施した。「あいさつの花」のカードを全校児童生徒に配布して5日間の達成状況を5枚の花びらにそれぞれシールを貼ったり色を塗ったりして評価した。1回目は6月に実施し、2回目の10月には、「あいさつの花」に挨拶に関する成果やエピソードも記入した。取組後には、全児童生徒の「あいさつの花」を校内に掲示し、意識付けと成果の共有を図った。 児童会、生徒会の児童生徒を中心にあいさつ運動の週間であることを昼の校内放送で呼び掛けた。 児童会や生徒会執行部で、校内にイラスト入りのポスターを掲示した。 	
評 価	A	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が理解しやすい挨拶についての教材を作成して実態に応じて活用し、挨拶に関する指導を全学級で実施することができた。教員から「〇×形式のクイズに参加できた。」「一緒に声を出して挨拶できた。」「動画を見ながら会釈して練習できた。」という感想が得られた。 一人一人に応じた挨拶の目標を設定して取り組んだことで、全校の児童生徒や教員が日常的に挨拶を交わす姿が多く見られるようになり、個人目標の達成率は97%とほとんどの児童生徒が挨拶に関する目標を達成することができた。
学校評議員の意見	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶は礼儀の基本であり、身に付いた挨拶は社会に出て必ず役に立つ。 児童が楽しんで取り組めるように工夫を凝らして目標達成されたことは、評価できる。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が意欲をもち続けて主体的に挨拶できるように、あいさつ運動やあいさつの花の掲示など主体的な挨拶が継続・拡大するような取組を工夫する。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	その他（情報活用）	
重点課題	教員のICT活用能力の向上3	
現 状	<p>本校は、令和2年度よりICT教育推進事業実施校となり、現在、児童生徒全員がICT機器の活用ができるように環境整備を進めている。</p> <p>昨年度は、新しく導入された機器や環境を生かしたICT機器の活用ができるように、児童生徒の利用の促進や教員の指導力の向上を図り、タブレット端末に親しむ児童生徒やICT機器を活用し指導力の向上した教員の数を増やすことができた。</p> <p>そこで、今年度は児童生徒に一人に1台導入されるタブレット端末や校内に導入されたWi-Fi環境を生かしたICT機器の活用ができるように、児童生徒の授業での活用の促進や教員の更なる指導力の向上を図りたいと考えている。合わせて新しく導入されるICT機器の管理面の充実も図り、タブレット端末の活用しやすい環境を整えていきたい。</p>	
達成目標	児童生徒のICT機器の活用の推進	教員のICT活用指導力の向上
	○授業で3回以上タブレット端末を使用した児童生徒の割合70%以上	○「ICT活用指導力が向上した」と答えた教員の割合70%以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部単位で研修会2回以上、外部講師による研修会を全体で1回以上行う。 ・タブレット端末等のICT機器の管理や使用するアプリの充実を図る。 ・各学部1授業以上の互見授業を行う。 ・児童生徒が授業で使えるおすすめアプリを教員に紹介する。 	
達成度	児童生徒のICT機器の活用の推進	教員のICT活用指導力の向上
	○授業で3回以上タブレット端末を使用した児童生徒の割合 73%	○「ICT活用指導力が向上した」と答えた教員の割合 85%
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が一人1台ずつタブレット端末を用いて、教員が作成したソフトウェアや市販のアプリを活用して効果的な学習が行えるように取り組んだ。 ・大学教授によるICT活用に関するオンライン研修会を始め、情報担当教員やGIGAスクールサポーターの教育用クラウドサービス利用方法の研修会等を一人3回受講した。 ・互見授業を行い、プレゼンテーションソフトの紹介やICT活用技術や方法を教員間で共有する機会とした。 ・児童生徒教職員のICT環境を整えるために、情報担当者によるアプリの導入、Wi-Fi接続状況の確認、アプリやファイル操作の不具合の対応などを行い、授業で円滑に活用できるようにした。 	
評 価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒は、アプリを使った漢字や平仮名の学習、写真や動画の撮影による植物の成長記録の作成、授業の振り返り、コミュニケーション手段としてのVOCAアプリの使用など、様々な学習場面でタブレット端末を活用しており、使用頻度も徐々に高くなってきている。実態により活用が進んでいない児童生徒もあり、今後の有効な活用方法について研修を進めていく必要がある。 ・教員は、児童生徒の学習の理解を進めるためにタブレット端末やプロジェクタなどのICT機器を活用し、児童生徒の実態に応じた教材を作成したり、事前・事後学習でプレゼンテーションソフトを用いて画像やイラスト等の視覚的情報を効果的に提示したりすることができた。また、教育用クラウドサービスのアプリを使用して、生徒が調べ学習で資料やレポートを作成した。
学校評議員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・短期間で児童生徒にタブレット端末を使用した学習を行うことができるようになり、子供たちの学習に広がりが見られている。 ・放課後等デイサービスの利用者もタブレット端末等を大変上手に使っている。ICT機器を使って様々な情報を得たり、コミュニケーションツールとして活用したりすることは、児童生徒の将来の生活に役立てることができる。 	
次年度に向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の主体的、対話的、深い学びを進めていくための、ICT機器の活用方法について授業実践を通して研修を深める。 	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった）